

研究者名※	藤井 洋子 FUJII Yoko	学位※	修士(文学・言語学)
所属※	文学部 英文学科	職名※	教授
連絡先	fujii@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/jwuling4107		
研究分野※	言語学・英語学		
研究キーワード※	語用論、談話研究、社会言語学、認知意味論、言語生活、異文化理解・異文化間コミュニケーション		
共同研究・競争的資金等の研究課題	インターアクションにおけるモダリティーの多言語間比較―「場の語用論」の構築に向けて (令和3年～6年度 科学研究費助成事業(科学研究費補助金)基盤研究(B)(一般))		
社会貢献・産学官連携活動等			
受賞歴	社会言語科学会 第19回 徳川宗賢賞優秀賞(2019年度)		

研究領域	言語学 語用論、多言語間比較	(SDGs)  
研究テーマ※	インターアクションにおけるモダリティーの多言語間比較 ―「場の語用論」の構築	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	【研究の背景・目的・内容】 本研究は、平成15年度より進めてきた国際共同研究「解放的語用論プロジェクト」によって構築された「場の語用論」研究の一環として、インターアクション（会話参与者同士による相互作用）におけるモダリティおよびその複数言語間比較対照研究を行うことを目的とする。「場の語用論」は、西洋語を中心とする既存の語用論理論に対し、日本語を含む非西洋言語の言語使用に立脚した理論の必要性から生まれたものである。このプロジェクトの一環として行った言語行動の5言語比較（日本語、英語、韓国語、タイ語、中国語）より、日本語・韓国語・タイ語と英語・中国語のインターアクションにおけるモダリティ表現の現れ方が大きく異なることが明らかになった(藤井 2018)。本研究では、これまでに作成済みのコーパス（Mister Oコーパス）に談話小辞（modal particle）を有するドイツ語のデータを新たに加え、インターアクションにおけるモダリティ研究に言語間比較という新たな視座を与え、その多様性を包含しうる語用論理論を追究する。このことは、多様な価値観、文化的規範、言語行動原理の解明を可能とし、共生社会のための言語研究ひいては現在求められている地球上の人々のコミュニケーションのあり方に貢献するものと考ええる。 【応用例、研究の展望】 本研究では、以下の学術的「問い」を追究する。 - 各言語におけるインターアクションル・モダリティはなぜ、何のために使用されており、そこに刻印されている文化とは何なのか。 「場を基体とする」「個を基体とする」とした文化的特徴とモダリティ使用との関連性はどのようになっており、「場の語用論」の枠組みによる説明は可能なのか。 - 西洋語の中でもモダリティ表現が豊富とされるドイツ語のデータを加えることにより、西洋語とアジアの言語という二項対立を越えた普遍的な言語と文化の関係を見いだすことはできるのか。 【研究方法の特色】 - 多言語比較対照研究のための映像データコーパスの構築（7言語）を行う。 - 収録したデータをもとに、モダリティ表現の言語間比較研究を行う。 - 国内外の研究協力者とワークショップを開催し検討・議論を行う。	

本研究関連 特許・論文等	【関連書籍・論文】 1. 片岡邦好・井出祥子編. 2002. 『言語・インターアクション・文化』 ひつじ書房 2. Hanks, W., Ide, S. & Katagiri Y. (Eds.), 2009. 2012. 2014. Towards an Emancipatory Pragmatics, SI—Part One, Two, Three <i>Journal of Pragmatics</i> 41, 44, 69. 3. Fujii, Yoko. 2012. Differences of situating self in the place/ba of interaction between the Japanese and American English speakers. <i>Journal of Pragmatics</i>. 44, 636-662. 4. 井出祥子・藤井洋子編. 2014. 『解放的語用論への挑戦』 くろしお出版 5. 井出祥子. 2016. 「グローバル社会へのウェルフェアリングイスティックスとしての場の理論—解放的語用論への挑戦—」『社会言語科学』 18 (2) 3-18. 6. 藤井洋子. 2016. 「日本人のコミュニケーションにおける自己観と『場』—課題達成談話と人称詞転用の分析より—」藤井洋子・高梨博子編 『コミュニケーションのダイナミズム—自然発話データから』 1-37. ひつじ書房. 7. 藤井洋子. 2018.『個を基体とする言語行動』と『場を基体とする言語行動』—英語・中国語・日本語・韓国語・タイ語の比較より—『社会言語科学』 21(1) 129-145. 8. 植野貴志子. 2017.「日本人の聞き手行動—「融合的談話」を事例として—」『日本語学 特集 インターアクションの科学』 Vol. 36-4 116-126. 9. 植野貴志子. 2018.「日本人とアメリカ人の会話マネージメントはなぜ異なるのか—教師と学生による会話の日英対照—」『社会言語科学』 21(1) 64-79. 10. Hanks, W., S. Ide, Y. Katagiri, S. Saft, Y. Fujii, & K. Ueno. 2019. Communicative interaction in terms of <i>ba/basho</i> theory: Towards an innovative approach to language practice. <i>Journal of Pragmatics</i>, SI “Quo Vadis Pragmatics.” 145, 63-71. 11. 井出祥子・藤井洋子編. 2020. 『場とことばの諸相』 ひつじ書房
共同研究・外部機関との連携への期待	・海外との連携 John Benjamins社 Culture and Language Use シリーズの主席編集者Gunter Senft氏から書籍出版要請を受け、現在出版計画中。